

「往生極楽」

私は、韓国の日本統治時代に関心があり、また自ら学んで身につけた韓国語の能力を維持するためにも、度々韓国を訪れます。いつも訪韓の際には選んでお寺を訪ねますが、以前にソウル・江南（カンナム）の奉恩寺（ポンゲンサ）にお参りした事がありました。参詣者の大半は女性でしたが、多くの参詣者でごった返していました。境内には多くの提灯が掛けてあり、その下には短冊があつて、日本の神社仏閣でもよく見かける絵馬のように、願い事がたくさん書いてありました。

ただ、日本の絵馬には「商売繁盛」とか「結婚ができますように」など、ストレートな願い事が多いのですが、奉恩寺の短冊には殆どが「極楽に往生することを願う」と書いてありました。

私は、この短冊の願い事を読んだ時に、日本との違いを感じました。しかしながら、かつて日本人はそうではなかったはずです。

『歎異抄』の第2章には、関東の門弟たちが京都の親鸞聖人を訪ねて来るくだりがありますが、そこにはわざわざ常陸国、今の茨城県から十余カ国の境を越えて、命を顧みずして京都まで訪ねてきた。その目的はひとえに「往生極楽の道」（この私がたすかる道）を問い聞かんがため、とあります。

私は、韓国へ行き、改めてお寺へ足を運び仏法聴聞するその原点について思い知らされたわけです。その時、多くの参詣者が僧侶の法話に耳を傾けていました。この国にはかつて東本願寺は約60カ所もの別院、布教所を作っていた歴史を持っています。